

●都市河川整備の地域への効果

私の住みかの江戸川区平井は、荒川と旧中川に囲まれた島のような地域です。この2つの河川がここ数年でかなり整備され、ウォーキングやジョギング、サイクリングを楽しむ人で賑わっています。

思えば、荒川はともかく旧中川については、30年前まではとても散策を楽しむような環境ではありませんでした。垂直に切り立ったコンクリート護岸に河川敷はなく、沿川は大規模な工場が並び、ドブ川のような水の流れはどす黒くメタンガスの泡が至る所で発生し、近寄るのもはばかれるようなものでした。また平井は、高度成長期に工場の地下水利用により、地盤沈下が進行し所謂0メートル地帯でした。

昭和46年から始まった江東内部河川整備計画は、江東デルタ地帯の内部河川について内水位を低下し豪雨時の遊水池としていかすと共に、親水空間を整備するというものでした。これにより旧中川には、新たに河川敷が整備され堤防に桜並木が創出され、また人道橋の架橋などによって、リニアで長大な散策空間が形成されました。東京都ボート協会の艇庫も整備され、毎年4月には中川ボートフェスタが開かれています。

これにより地域イメージは格段に向上し、最近では旧中川を売りにしたマンション販売も多くあります。また沿線住民への散策機会の提供は、地域の方の健康増進に大いに役立っています。オープンスペースや大規模なみどり空間の少ない東京の下町にとって、こうしたリニアな空間というのはとても大切だと実感しています。

文責者：木村晃郁（株式会社都市計画同人）
紹介者：高尾利文（第二計画部）

●中越地震で被災した中山間集落の復興に係わって

平成16年10月の中越地震で全村避難となった中山間の集落「法末（ほつすえ：長岡市小国）」の復興に係わるようになって、2年9ヶ月が経ちました。これは、(NPO)日本都市計画家協会 中越震災復興プランニングエイドのメンバーとして、仕事とは違った形で係わってきたものです。

住民のおよそ8割が集落に戻ったものの、高齢化率が7割を超える集落では「これからも住み続けられる集落づくり」が大きな課題です。『東京もんの私たちに何が出来るのか？』『あれをしよう、これをしよう集落の方々を振り回しているだけで、何の役にも立っていないのではないか？』『私たちが通えなくなった後、何が残るのか・残せるのか？』、悩み・迷いはつきません。少しでも何かの助けになりたいと言っている私たちこそ、助けてもらっているのでは？と思うこともあります。

「住み続けられる」ために必要な活動策は何か？、集落が率先してやりたいと思えるものをいくつか見つけられるか？。日本全国で干を越す集落が消滅の危機にあると言われる中、現場での模索が続きます。

出ッ所幸子

●肥前浜宿と赤鳥居

佐賀県鹿島市浜町にある肥前浜宿は、長崎街道の宿場町として栄え豊かな街並みがつくられました。土蔵造りや茅葺町家が建ち並び、平成18年4月酒造通りを中心に重要伝統的建造物群保存地区に指定され、その種別の一つが「醸造町」もう一つが「港町・在郷町」で、これらの名称による指定は共に全国初です。造り酒屋がなんと7軒もあります。

鹿島市浜町の発展の礎は町の中央を流れる浜川にあります。上流では多良岳からの清流を生活や産業用水として使う一方で、直近の下流では河港として機能していたことに起因します。江戸時代から「浜千軒」と言われ、商家町・漁師町・下町・田園など変化に富んだ街並みが広がります。

昨年10月、74年間にわたり浜町のシンボルであり続けた赤鳥居が老朽化のために取り壊しになりました。昭和8年に祐徳稲荷神社の一の鳥居として建立されたものですが、平成17年3月に発生した福岡沖玄界地震の際に傾いたことが

原因でした。赤鳥居は肥前浜駅前に位置し、車のない昭和初期の当時は、駅から浜川沿いに祐徳稲荷神社まで至る約3キロメートルは、大勢の参拝客で賑わっていたことでしょう。

なお、赤鳥居については、悲しいことながら神社側としては再建しないことになりましたが、地域のシンボルとして、地元が再建委員会を発足し募金活動をされています。

高尾利文（第二計画部）

発行責任者：代表取締役 庄山 高司
事務局：株式会社アルメック 業務部
東京都目黒区青葉台 1-19-14
電話 03-5489-3211・FAX 03-5489-3210
Eメール hotnews@almec.co.jp
ホームページ <http://www.almec.co.jp/>

Copyright 2008 ALMEC Corporation. All rights reserved.